

株式会社「渋谷農園」 代表取締役

渋谷昌樹さん

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

大消費地である京都市と大阪市の中間に位置し、木津川と淀川に囲まれた肥沃な土壌に恵まれ、約300畝の農地を有する八幡市。時代劇の撮影に利用され、同市のシンボルでもある「八幡の流れ橋」から南に約1キロの田園地帯に、家族経営を法人化した株渋谷農園がある。「おいしい野菜をいろいろと工夫して作るのが楽しくてたまらない。そんな思いを消費者に届けたい」と代表取締役の渋谷昌樹さん(33)は話す。

同市は府内有数の農業生産・販売の好適地で、元気で若い担い手も多い。JA京都やましろ青壮年部八幡市支部には63人が集い、渋谷さんもその一人。渋谷さんは、大学の農学部に進学したものの一般企業への就

職を考えていた時、サラリーマンでありながら水稻の基幹作業を約7畝受託していた父の朋和さん(64)が退職して農業に専念し始めたことから、自分も農業の道を進むことを決意。同時に30歳で農業経営を会社にする目標を立てた。

「農業は大好きだけど、これで食べていけないのか不安だった」と渋谷さん。初めは父の後ろについてナスやキュウリ、ネギなどの農作業を手伝うことで生産技術を学んだ。さら

に、青壮年部の先輩やJAの指導を受けて、徐々にいろいろな野菜作りに挑戦する中で腕を磨き、「九条ねぎ」を経営の柱とすることができた。そして30歳を迎えた2013年、JAなどの指導を受けて家族が役員となって同社を設立した。

「会社を設立したのは、決してわが家の農業経営だけのことを考えたのではない」と話す。農業が好きな人が、農業で生活できるための受け皿となれる組織づくりを目指した。



▶ ハウスで自慢の「九条ねぎ」をアピールする渋谷さん

渋谷さんの志に引かれ、同社の門をたたいた若い男性3人を正社員として受け入れた。同社で農業を一生の仕事にする覚悟で彼らは生産現場に専念する。出荷調整作業は近隣で雇用するパートが行い、

会社の経営管理は役員となった家族が行う分業体制とした。これを専務の父が全面的にサポートする。JAが開設する同市内の大型スーパーのインショップへの出荷の他、大阪・東海・東京の各方面への市場に出荷する。

渋谷さんは「若い者が多いので失敗やロスも多いけど、農業は自然と語り合いながら築くもの。大変で難しいが、楽しい仕事だと思う。機械化が進んでも大切にしなければならぬのは、安全で安心できる農産物を届けたいと思う気持ちだ。そんな人たちが100年たっても農業で生活できる会社に育てていくこと、これが私の次の目標だ」と話す。

.....

■法人所在地 八幡市野尻土井ノ内12(電)075(963)52669。

■法人概要 2013年7月設立。取締役5人、社員3人、パートタイマー24人。経営面積8畝(九条ねぎ2・5畝、ハウレンソウ1畝、万願寺とうがらし0・3畝、キュウリ0・3畝、イチゴ0・2畝、水稻「ヒノヒカリ」3畝など)。農機はコンバイン1台、トラクター2台、油圧ショベル1台、米乾燥機1台、ねぎ洗い機1台。

100年続く会社をめざす